

## ニンフェアール第10回公演『東洋と西洋の絃』7/20(日)@5PM 一般 3,500円

### ～ギターの佐藤紀雄さんと箏の木村麻耶さんを迎えて：インタビュー第2弾～



今回のコンサートは、ニンフェアールを立ち上げて10周年目となる記念すべき公演となります。前回の佐藤紀雄さんのインタビューに引き続き、第2弾は、北海道出身の木村麻耶さんのインタビューです。ギターと箏によるユニークな編成による、国際的に活動される演奏家によるコンサート！

生演奏では、新たな発見が絶対にあるはずですので、お聴き逃しなく！

ご来場お待ちしております。

#### ♪名古屋という何を思い浮かべますか？

以前、あるご縁から名古屋にて演奏を依頼されたことがありました。桐朋時代の箏の仲間と共に、色々な曲を持ちより、アイデアを出しながら準備した記憶が思い出されます。箏の身長は約180センチと長いので、通常は車で運搬しますが、台車に巻き付けて運ぶことも可能です。着物と箏を持っての新幹線移動も大変でしたが、演奏も楽しく、その当時の仲間とともにグループを立ち上げるきっかけにもなりました。勿論今でも、運べる距離でしたらどこへでも箏を担いで演奏しに行きます。

#### ♪箏を始められたきっかけは？

私の家は家元でも音楽一家でもありませんが、小さな頃から日常的にレコードを聴いたり、箏以外の楽器を弾いたり音楽に触れる機会が多かったように思われます。私が生まれる前から箏は家にありました。腕を痛め、弾くことを断念された方から母が譲って貰っていたのです。両親も以前から箏の音色が好きだったらしく、丁度その頃私も誕生したのでこの機会に習わせたそうです。北海道の教室では年代の近い子も多く、合奏したりよく遊びました。好き勝手に自由に弾かせて頂き、先生は大変だったと思います。感謝に堪えません。その頃からの出来事が、今の演奏スタイルとも結び付いているかもしれま

せん。箏とは物心つく前から既に出逢っていたので、切っても切り離せないそんな存在です。

#### ♪クラシックファンのお客様のなかには、邦楽器に馴染みのない方が多いと思います。箏の魅力とは何でしょうか？

一言でいうと、音・余韻・間ではないでしょうか。箏といえば、正月にテレビ等から流れるイメージが強いです。一音でも聴けば箏とわかる音、余韻の響きが特徴です。そのような意味では音色は繊細だけれども、アークが強い楽器ではないかと思います。箏は右手の親指・人差し指・中指に象牙の爪を付けて弾きます。左手はその他の絃を押したり、引いたりという要素が加わります。発絃した後、余韻のタイミングを変えることで様々な表情や、印象をがらりと変えることが出来、個性を出せるのも魅力の一つではないでしょうか。

チューニングも奏者が行うため、自分好みの響きにできます。音が鳴っていない部分の間も音楽と捉え、非常に大事にしている部分です。その時の心境の変化によって、奏者独自の間が生まれるので、いつも新鮮な音楽が生まれるのも大きな魅力ではないでしょうか。

#### ♪今回、25絃箏を使用されますが、古典的な13絃箏との違い、魅力、歴史などを箏に馴染みのないお客様に

**簡単に説明をお願いします。**

今日、箏と呼ばれる楽器は奈良時代初期か、その前後に中国大陸から伝来したと伝えられています。その後日本人好みによって、時代を変え形を変え、今の形に変化しました。二十五絃箏は、1991年に桐朋学園短期大学にて教授もしておられる野坂操寿先生により制作・発表された新しい楽器です。十三絃箏が持つ音域を全て一面でカバー出来、低音域も充実し、更に箏の内面に踏み込める独奏楽器として開発されました。二十五絃箏の前に二十絃箏も開発しておられますが、より良い音や改良を続け、二十五絃箏に辿りついたそうです。絃の太さも、十三絃箏では同じですが、二十五絃箏は多種に渡り、それにより豊かな音色の響きも得られました。また、右側にピンをつけ、絃を絞めたり緩めたりしてチューニングも容易に出来るようになり、様々な曲にも対応出来ることで、箏の音楽の幅がさらに広がっていきました。

**♪箏で古典作品だけではなく、現代作品を演奏されることになったきっかけはあるのでしょうか？**

北海道の先生は音楽に対してとても意欲的で、幼少から古典も現代曲も分け隔て無く、様々な作品を勉強させて頂きました。そのような環境で育ったので、どの音楽に対しても分け隔てなく、自然に寛容に受け止められるようになったかもしれません。桐朋へ入学してから他楽器とのアンサンブルに違和感なく積極的に参加してきました。その中でも、今回もご一緒させて頂ける佐藤紀雄先生には、私が現代作品を演奏するきっかけに多大なる影響を与えてくださった先生です。先生が指揮をとるアンサンブル・ノマドの定期演奏会では、いつも音楽が新鮮な生き物であるかのように流れていて、毎回食い入るように聴いていました。その時に、まだまだ知らない世界がある。箏を通じて、もっと音楽について深く知りたいと思うようになってきました。現在では仲間と公募に

て集まった作曲家とともに、東京にて年1回新曲演奏会を開催し、この新しい楽器の可能性を切り開こうと奮闘しています。

**♪今回のプログラムには、新作を含んだ箏の為の現代音楽作品が4作品含まれています。現代音楽は難しいイメージで躊躇してしまうお客様に、アドバイスをお願いします。**

現代音楽に限らず、音楽は言葉が無い分、解釈が十人十色ですし、理解することが難しい部分も多くあるかもしれません。今日残っている傑作や名作といわれている音楽でさえも、発表された時は必ずしも全てがうまくいき、受け入れられていたわけではないそうです。特に最近の音楽は感覚的要素に訴える作品も多く、より繊細で綿密な作品がたくさん生まれています。現代音楽は、そういう意味で、様々な挑戦が詰まった非常に面白い世界だと思います。今私達の時代からすれば古典は昔の音楽ですが、その当時の人々にとっては現代音楽です。その時代の風土や流行を表しています。斬新で時には革新的な現代作品が生まれ、時代によって音楽とともに、生活も発展していきました。

音楽は必ず新しい発見や世界につれていってくれ、日常生活に広がりを持たせてくれると信じています。そんな日常をご一緒に過ごすことが出来たら、この上ない幸せです。(聞き手：伊藤美由紀)

**インタビュー第3弾は、当日、会場で新作を発表します作曲家の声をお楽しみに！ ギター、箏ともに繊細な音色、表現をもった楽器ですので、生演奏でしか体験できない音響空間を、当日、演奏家、作曲家とともに皆様と共有できることを願っております。**